第 8 回「日中未来創発フォーラム」（福岡）参加報告レポート

日本大学
商学部 3 年
田中俊行

10 月 24 日から 26 日の 3 日間にわたり、福岡で開催された第 8 回「日中未来創発フォーラム」に参加した。今回のテーマは「未来の環境と私たち」であり、日本と中国の大学生・大学院生が一堂に会し、環境問題を切り口に、未来社会のあり方や日中関係の展望について討論を行った。

私は、所属ゼミナールの教授の紹介により、日中関係学会の一員として参加するとともに、スタッフとしてフォーラム運営の補助にも携わった。

本フォーラムを通じて、専門家による講義や多くの学生・研究者との交流を通し、環境・観光・国際関係といった異なる分野を結びつける新たな視点を得ることができた。特に、現地での体験を通じて「環境」と「人とのつながり」をより身近に感じる貴重な機会となった。

1. 日中未来創発フォーラム概要

本フォーラムは、笹川平和財団笹川日中友好基金の支援のもと開催され、日本と中国の学生が一堂に会し、「未来の環境と私たち」というテーマのもと、環境問題や持続可能な社会のあり方について議論を行った。テーマは単なる環境保全にとどまらず、地域社会や人と人との関係性を含めた広い視点から、より良い未来を考えることを目的としていた。

フォーラム当日は、福岡市の今津公民館を会場に、専門家による講義のほか、環境をテーマにしたカードゲーム「CHANGE FOR THE BLUE」を体験した。このゲームでは、海洋ごみ問題をはじめとする環境課題に対して、ビジネスや経済の観点からどのように持続可能な仕組みを構築できるかをチームごとに考える内容であった。単なる環境保全ではなく、「経済発展と環境保全の両立」という視点から議論が展開され、非常に実践的で学びの多い時間となった。

講義の中で印象に残ったのは、ある講師の方が述べた「知動（ちどう）」という言葉である。これは「知って、動く」という意味を持ち、知識を得るだけで終わらせず、そこから行動に移すことの大切さを示している。この言葉は、環境問題に限らず、私自身の学びや研究への姿勢にも通じるものであり、強く心に残った。

その後、九州大学にてグループワークを実施し、参加者は 6 つの班に分かれて討論を行った。私の班では「生物多様性の減少」をテーマに、福岡県沿岸に生息する絶滅危惧種・カブトガニを中心に議論を進めた。カブトガニは環境変化や開発により数が減少している一方で、その血液が医療用検査薬の材料として活用されるなど、人間社会にとっても重要な存在である。班の中では、「人間の利便性と生物の生態をどのように両立させる

か」「自然の循環の中で生物の命をどう位置づけるか」といったテーマを深く掘り下げた。議論を通じて、環境問題は単に「守るべきもの」ではなく、人間と自然が互いに支え合う関係性の中で考える必要があることを実感した。

また、フィールドワークとして長浜地区を訪れ、現地の環境保全の取り組みを学んだ。地域の方々が主体的に行う海岸清掃活動や、地元企業と協働した持続可能な街づくりの事例などを通じて、地域全体で環境意識を高めることの大切さを実感した。さらに実際に海辺に足を踏み入れ、波の音や潮風、透き通るような海の美しさを肌で感じることで、「自然を守る」という言葉の意味をより深く理解できた。こうした実地体験を通じて、机上の議論だけでは得られないリアルな気づきを得ることができた。

2. 参加前と参加後の変化について

私は現在、大学のゼミで「地方における中国人観光客と行政・事業者の関係を再考する ―静岡県下田市を事例に―」というテーマで研究を進めている。これまでの関心は観光振興や地域経済の側面に重きがあり、環境問題について深く考えた経験はあまりなかった。しかし今回のフォーラムを通して、「観光と環境は切り離せない」ということを実感した。観光地の魅力は自然環境によって支えられており、地域活性化を考える上でも、環境保全の視点は欠かせない。

また、日中両国の学生との議論を通じて、環境に対する価値観の違いと共通点の両方を知ることができた。例えば、中国人学生の中には、「環境問題は国の発展とともに解決していくべき社会的課題だ」という意見が多く聞かれた。討論の中では、「経済成長と環境保全を両立させるためには、国家として制度や企業の仕組みを整える必要がある」という発言もあり、環境政策を“社会全体の仕組みづくり”として捉える姿勢が印象的だった。一方で、日本の学生からは、「一人ひとりの小さな行動の積み重ねが大切」という意見が多く、個人の意識変革を重視する傾向が見られた。このような違いを知ることで、両国の文化や発展段階を踏まえながら、自国を客観的に見つめ直す良い機会となった。

フォーラムを終えた今、私自身の将来像にも変化が生まれた。私は将来、観光を通じて日本と中国をつなぐ架け橋になりたいと考えているが、今回の経験を通して、単に人や文化をつなぐだけでは不十分だと感じた。「環境を守りながら持続的な交流を築くことこそが、真の意味での架け橋になる」その気づきが、今後の研究や将来の進路を考える上での大きな指針となった。

3. フォーラム全体を通して感じたこと

全体を通して印象的だったのは、参加者一人ひとりの主体性の高さである。グループワークでは国籍や専門を越えて、互いに尊重し合いながら意見を交わす姿勢があり、議論が非常に活発であった。また、スタッフとして運営補助に関わる中で、裏方の視点からフォーラム全体を支えることの大切さも学んだ。

福岡での開催は私にとって初の九州訪問でもあり、地元の文化や人の温かさに触れることができたことも大き

な収穫であった。フォーラム後には、環境や日中関係に関する知識だけでなく、全国の学生との新たなつながりが生まれたことを嬉しく思う。

おわりに

今回のフォーラムを通して、私は「環境を守ることは、人と人をつなぐこと」であると実感した。環境問題は一国で完結するものではなく、国境を越えて協力しなければならない課題である。だからこそ、日中の若者が率直に意見を交わし、共に行動するこのフォーラムの意義は非常に大きい。

今後もこのような交流の場に積極的に参加し、学びを実践に結びつけながら、日本と中国の架け橋として貢献していきたい。最後に、このような貴重な機会をくださった笹川平和財団の皆様、そして運営・参加者のすべての方々に心より感謝申し上げます。